IS ≪The Phazon Erosion≫

究極の混沌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ ≪Ｔｈｅ Ｐｈａｚｏｎ Ｅｒｏｓｉｏｎ≫

【Ｎコード】
Ｎ４８８５Ｖ

【作者名】
究極の混沌

【あらすじ】
サムスに敗れたダークサムス、プライムは薄れゆく意識の中、暗い闇の中で存在が消えるのを只々待っていた。だが突然彼に邪神の声が聞こえ、彼は己の問いの答えを見つけるため邪神に生きることを望むことを伝える。そして新たなる始まりを迎える。

プロローグ

何もない闇の中声が響く。

――――負けた・・・・

――――また我は負けたのか・・・・

闇の中に輝く微かな青い光から聞こえてくる。

――――何故勝てない、我は奴を超えたはずなのに、奴の力をコピーし、フェイゾンを集めつづけパイレーツ共を操り、奴の仲間を洗脳し戦わせたというのに。

――――たった一人の賞金稼ぎも殺せないのか、我は・・・。もうフェイザも消え去った、フェイゾンの元がなければもう体を再構成することもできん。ここまでか・・・

光は徐々にその光を失い始める。

『生きたいか？』

――――何？

突然の言葉に再び意識が覚醒する。

――――何者だ？どこにいる。

『私はしがない邪神さ。そしてここにはいない、私はお前の意識に

語りかけているのだからな。』

――――その邪神が我になんのようだ？

『さっきも聞いただろう？「生きたいか？」と。』

――――生きたいとしてどうするつもりだ？もう我は復讐の気はないぞ・・・（あそこまでぼこぼこにされたら気も失せる。）

『生きたいのならさらにパワーアップさせて復活させてやろうかと思ったんだが。』

――――何？それは本当か！？（これなら奴に勝てｒ『異世界に行ってもらうがな。』・・・現実は甘くない、か。）

『どうする？生きるか、それともこのまま消え去るのか。』

――――（どうせすることもないのだが。いや、ちょうどいい機会か？なぜ奴より強くなった我がやられたのか知る機会かもしれない。人間を知るための。）そうだな、我は生きる。そして答えを探す。

『そうか、分かった。どんなパワーアップするかはあとのお楽しみだ。』

――――頼む。最後に聞かせてくれ。

『なんだ？』

――――お前の名は？

『・・・アンラ・マンユ、それが俺の名前さ。』

その言葉と共に我の意識は途切れた。

その日、ある世界の海にひとつの隕石が落下した。
着弾地点からは強い放射能反応がしたらしい。

そして、彼・・・プライムの物語は動き始める。

目覚め（前書き）

ダーク「作者、ここまで正確とか変えるとまるっきり別人に思えてくるんだが・・・」

作「気にするな」

目覚め

日本海海底にて・・・

『起きろ・・・』

「・・・なんだ？」

俺は重い瞼を開ける《・・・・・・・・・》。
瞼？俺にそんなものがあったか？そもそもなぜ一人称が我から俺になっているのだ？

『それはその喋り方だといろいろまずいからかえさせてもらった。』

「まあ、いいが。それよりここはどこだ？」

『ここは地球っていう星の日本海の海底だ。』

地球？聞いたことがないな。いや、もともと知ってる星は少ないが・・・

「もう一つ、なぜ人間の生身の体なんだ？」

『それはそうでしょ。街中に前の姿のお前がいたら混乱するからな。ここには人間と動物しかいないんだから。』

そういうことか。

『パワーアップについてはあとだ。とにかく此処を離れるのが先だ。』

「なぜだ？」

『さっきからお前の放射能反応からお前を見つけようとしている奴らがいる。』

たしかに海底に人間、それも生身で生きているなど奴らにとってはおかしいことか。

「どこに行けばいい？」

『ちょうどこの真上の海面に次元のひずみを開いておいた。そこに飛び込め。』

用意周到だな。まあいい。

「シャインスパーク！」

俺の体が薄い光に包まれる。

「ふん！」

俺は地面を蹴り、真上に飛ぶ。シャインスパークを使ってるからかなりのスピードが出ている。（時速２００ｋｍ位）

「・・・・あれか！」

一箇所少し色が違うところがあるおそらくそこだろう。歪に入ると

目の前が光で埋めつくされ、いつの間にか浜辺にいて、知らない男が立っている。

『よし、じゃあいろいろ話すこともあるし始めるか。』

「誰だ貴様、まさか。」

『そうだ、お前さんを助けた邪神だ。』

いくら神でも姿は思ったより人間と一緒だな。

『別に神だからって化け物じゃないからな。あと話を進めるぞ。』

「わかった。」

『とりあえずこれがお前に足された能力だ。』

そういって一枚の紙を渡してくる。

「ふむ、なになに？

1、フェイゾンの無限体内生成能力。

2、吸収できていないサムスの武装＋洗脳した者の武装、能力

3、ゲッター線の生成能力

4、放射能隠蔽・・・なんだこれは？」

『この世界では放射能がどうとかうるさくてな、そうでもしないとすぐに目を付けられて追われることになる。』

「そうか、あとこのゲッター線というのはなんだ？」

『あ～それか、まあ、簡単に言うと進化を促す未知のエネルギーだ。
この世界の端末にも載っているからそれで詳しいことは調べてくれ。
説明すると長くなる。』

面倒だから投げたな。・・・そういえば

「俺はどこに住めばいいんだ？」

『ギクッ！？え～とそれはですね・・・』

まさか・・・

「忘れてたなんてことはないよな？」

そんなことになれば俺はどうすればいいのだ？野宿でもしろと？

『野宿か居候で頼みます・・・・』

「・・・・・・・・・・」

ガキンッ！

『ちょっ、無言でこっちにアームキャノンを向けｎ「ヒュドン！」
ブルアアアアアア！？』

このあとどうするのかが先決だな。

主人公紹介（前書き）

ダーク「最近作者のタグにゲッターをよく見るんだがなんでだ？」

作「ハマってるだけですけど何か？」

主人公紹介

名前　フェイザ・ダーク　（ダークサムスだと人の名前として不自然だから）

性別　男

元フェイゾン生命体で今は生身の人間。でもハイパー化した時のみ完全にフェイゾン化できる。
生身での発動は人間としての肉体が汚染されるためあまり出力を上げると肉体がフェイゾン化する。
（ダークサムス本人のためゲームオーバーにはならない。）
外見はデュララの平和島静雄を黒髪にして紅眼にしたもの。
人として再誕したせいか感情が豊かになった。

オリＩＳ　プライム
邪神にもらった専用機。コアも邪神製のためオリジナルより少しスペックが高い。
武装はサムス・アランや他のバウンティーハンター、ダークサムスの物でハイパーモードを負荷なく発動できる。
待機時は黒い指輪になっている。
ちなみにゲッター系の技はＩＳ装着時しか使えない。（生身だとハイパー時でも反動に耐えられないため）

ハイパーモード

体内のフェイゾンを開放することによって発動する。発動時目の色が暗い青になり、体の至る処に青い線が浮き上がる。
いくら発動しててもコラプションモードにはならない。というより常にコラプションモードのようなもの。
フェイゾン系兵器の威力が上がり、機体の性能も爆発的に上昇する。
任意での解除か、１分の経過で解除される。

プライムは居候になりました

ＳＩＤＥフェイザ（ダークサムス）
くそ、あの駄邪神め。住居がないとかほざきやがって、これからどうしろというのだ・・・

ぐうぅぅ～

・・・腹減った、あいにく腹が減っているのは俺本体ではなくこの肉体なのでフェイゾンでは腹を膨らませない。ああ、肉体って不便だ。なんかだんだん意識が薄れて・・・

バタン！

フェイザさんがログアウトしました。

ＳＩＤＥ？？？
さて・・・買い物もすんだしそろそろ帰ろうか。

・・・ん？だれか家の前で倒れている。なんだかぴくりとも動かな

いが、生きているよな・・・・？
私は失礼だが倒れている人をつついてみた。
「・・・う。」
どうやら生きているようだ。
「大丈夫か？」
なんだか顔色が悪いので安否を確かめる。
「・・・し。」
「なに？」
なにかつぶやいたようだがよく聞こえない。
「飯をくれぇ・・・。」
「・・・・・」
・・・一夏は家にいただろうか。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ
ＳＩＤＥフェイザ

俺は今ものすごく感謝している。どこぞの親切な人間が倒れている俺を助けてくれさらに飯まで食わせてくれた。

え？残忍な性格はどうした？生きるか死ぬかでそんなことは気にしてられなかったんだ！

「ごちそうさま。さて、倒れているところを助けていただいてありがとうございました。」

助けてもらったんだから礼くらいいっておかんとな。

「いや、礼を言われるほどのことはしてない。」

十分言われることだと思うが・・・・

「私は織斑　千冬だ。そしてこっちが弟の一夏だ。」

「よろしく、それにしてもすごい食い振りだったな。」

「ああ、長い間何も口に入れなかったからな。俺はフェイザ・ダークだ。よろしく。」（実際ダークサムス時は口がないので事実）

「で、フェイザはなんで家の前で腹をすかして倒れてたんだ？」

異世界から来てまだ金を持っていなかったからだなんて言えるわけないからな・・・・

「いろんなところを旅してて金が尽きたから何も食べれなくて倒れ

てた。」

「旅？」

突然千冬が顔をしかめる。

「まだお前は私と同じくらいに見えるが、親は認めたのか？」（この時の千冬は中学生くらい）

「許可も何も親いないし。」

おれはハッハッハ、と笑っていう。ふつう笑わないって？俺の中身は人間じゃないから知らんよ。

「「・・・・・・・」」

ふたりは俺の言葉を聞いた瞬間沈黙した。

「・・・どうかしたか？いきなり黙りこくって。」

「いや、その・・・すまん。」

千冬が謝ってくる。一夏はまだうつむいて黙ったまんまだ。

「別に気にしてない。親に関する記憶もないしずっと一人だから平気だ。」

「そうか、それでどうするんだ？このあとは。」

「もう金もないしこの辺で住む場所を探そうかなと思ってんだが、

金ないからどっか雨風を防げるところでもさがすさ・・・」

・・・なんでこんな惨めな事に。それもこれもあの邪神のせいだ！

「なあ、よかったらここに住むか？」

突然一夏がしゃべった。

「一夏！？」

「でも千冬姉・・・」

いきなりのことでこっちも驚いたが・・・そうだな。あっちが構わないならそうさせてもらおうか。

「そっちがいいなら俺は一向に構わないけど・・・」

「千冬姉・・・」

「うぐっ・・・はあ、分かった。ただし、住むからには家事とかも手伝ってもらうからな。」

どうやら千冬は折れたらしい。

「さすがにそれくらいする。」

家事というのはよくわからんが・・・あとで一夏に聞こう。

こうして織斑家に新しい住人が増えた。

ＩＳ（前書き）

説明してなかったのでここでします。

フェイゾン

メトロイドプライムシリーズに登場する放射能物質で動植物のＤＮＡに対して急激な突然変異を誘発させる効果を持つ。

自然界の物質に浸透し、鉱石や液体の状態になり時間の経過により、気化・結晶化する。色は水色だが純度によって赤や黒になり濃度が高いものほど突然変異の誘発因子レベルが高くなる。だが、被爆したものは突然変異を起こすか、その強い毒性により『フェイゾン病』にかかるか、死に至る。

突然変異を起こしたものは、能力や筋力などが増幅され急激な進化を迎えるが、体内組織が低下し、寿命が縮んだり身体や脳が萎縮するなど非常に不安定な性質を持つ場合もある。

今作においては、主人公がフェイゾン生命体であり、大気中の（直接も）フェイゾンを吸収するダークサムス特有の力を持つため万が一主要キャラがフェイゾン病になっても治療可能。

フェイゾン病についてはもっと長くなるのでググッてください。すみません。

IS

織斑家に居候してある日のこと

「相変わらず一夏の飯はうまいな。」

「いや～それほどでも。」

まんざらでもない一夏

「・・・・・・」

そして若干落ち込む千冬。

「・・・あ～どんまい。」

「ほっとけ・・・・」

いかんいじけた。数日前、突然千冬が飯を作ると言い出した。折れは構わないんだがなぜか一夏が焦っていた。そしてその理由は千冬の料理を食べて分かった。こいつは料理が苦手だと、もっと言うなら料理の腕は壊滅状態だと。そして未だにいじけているということである。

ぼそっ（フェイザにいいとこ見せたかったのに・・・）

何かつぶやいたが全然聞こえなかった。

『では、次のニュースです。』

『一週間前、日本海に隕石が落ちたと思われる場所から謎のエネルギーが発見されました。』

「・・・・・は！？」

俺は思わずはしを落とした。

（隕石ってまさか・・・俺がこっちに来た時の。）

ということは謎のエネルギーって・・・案の定、俺のフェイゾンエネルギーのことだな・・・。

「どうした？フェイ兄、そんな険しい顔をして。」

一夏が俺の顔を見て言う。

「ああ、一夏、千冬。ちょっと急用ができたから出かけてくる。」

「出かけるってどこへ？」

「日本海だ。」

「「え？」」

二人は突然のことでポカ～ンとする。

「じゃあ、行ってくるからな。」

「ちょ！？・・・・」

おれは返事も聞かず飛び出していった。

「さて・・・・回収するにしてもこのままじゃ顔を見られかねない。どうするか・・・・」

以前の姿なら顔も見られないしうまく暗闇に隠れられるんだが。

『だったらハイパー化すればいいよ』

突然あの邪神の声が聞こえた。

「どういうことだ？」

『ハイパーモードになったら体がフェイゾン生命体になるからできるよ。でもあまり長い間ハイパー化してるとお前のその体が徐々に汚染されるから気をつけろ。』

「そうか、たすかった。」

たしかに俺本体はフェイゾンそのものだか平気だがこの肉体はあくまで人間のもの。なんの負荷もないのは無理か。

俺は体内のフェイゾンを開放する。すると、目が暗い青色になり髪

も少し蒼い光を帯びている。俺は昔の姿、ダークサムスに姿を変える。

「速攻回収しないとまずいな。人間共に利用なんてされたらたまったものじゃない。」

俺は最初に目覚めたところに向かってフェイゾンをたどっていく。

ＳＩＤＥ潜水艦

「しかし、なんで我々がこんな訳の分からないエネルギーを見張らないといけないんだ？」

「仕方ないだろ、アレは高濃度の放射線を発しているんだ。迂闊に触れたら何が起こるのかわかったもんじゃない。」

「でも「ほ、報告！」！？どうした！」

「海上より強力な放射線反応！こ、こちらにちかずいてきます。」

近ずいてくるだと？一体何なんだ・・・・

ＳＩＤＥフェイザ

さてフェイゾンの発生源はこっちのようだが・・・・なんだ？
おれは何かフェイゾンの放つ光とは違う人為的なものを感じたので
そちらを確認してみる。
するとフェイゾンの近辺を回っている潜水艦を見つけた。だが、ど
うやら向こうもこっちに気づいたらしい。こっちも見つかるといろ
いろ面倒なんでね、悪いがしばらく凍ってもらおうか。

右腕のアームキャノンにアイスミサイルを装填し、潜水艦のエンジ
ン部に打ち込む。

すると段々スクリューの動きが止まっていった。

「さて今のうちに回収するか。」

俺はフェイゾンに近寄り手をかざし、吸収していく。すると、フェ
イゾンと共に何かを吸収した。

「ん？なんだこれは・・・」

吸収したそれは指輪に姿を変え俺の人差し指にはまっていた。それ
と同時に膨大な情報が頭に流れてくる。

「Ｉ・・・・Ｓ？」

どうやらこの世界特有の機械らしい。要は武装する鎧のようなもの。

「・・・・あいつも気を利かせてくれたな。」

場合によっては使うときも来るだろう。

「さて、要は済んだ。さっさと帰ろう。」

腹もすいたことだしな。はやく一夏の飯が食べたいな。

天才というより天災（前書き）

ダーク「結局作者は誰が好きなんだ？」

作「ん～？えっと、千冬、束、真耶・・・」

ダーク（作者は年長派か・・・）

作「・・・とラウラ。」

ダーク「一人だけ年下！？」（キャラの）

作「悪いか？現実だったら同い年だっての・・・」

ダーク「そういえばお前高一だったな。（わすれてた）」

ちなみに前回と今回の話は既に白騎士事件が起こったあとのことです。

天才というより天災

そういえばこのＩＳってどんなだろう・・・

おれは日本海を飛んでいるときに思った。もし変なのだったらどうしよ・・・。気になったら止まらないので展開してみた。そしたら、

「これって何か見たことあるな・・・」

妙にゴツゴツしてて、黒い装甲。
蜘蛛のような三本の太い爪。
所々についている赤、黄、紫、白、青のライン。
そしてアームキャノンから出た青い人型の手に胸についたバイザーのようなもの・・・・

簡単にいえば人型になったプライムの甲殻の胸にダークサムスのバイザーがついてて、腕は両腕がアームキャノンのようになっててそこから手が出ているという感じである。爪は背中に3本生えている。

「これって完全に俺がモチーフになってるな。・・・あとこのマークはなんだ。」

中のモニターに写っているのは、？マーク。つまりこれは、

「放射能を放っていると・・・」

元々装甲はフェイゾン鉱石で出来ているため放射能を放っている。
（一応薄い膜でコーティングされてて触れても大丈夫になっている。）まあ、隠蔽能力をもらっているのでハイパーモード以外は感知さ

れない。

「こりゃあ、やばい機体をもらってしまったな。う～ん、この辺には生き物いないしこれでハイパーモードになってみるか。」

とりあえずやってみたところ変化したのは、
１つ、機体のラインから青い光が発せられる。
２つ、バイザーの色が紅くなる。
３つ、全武装がフェイゾンエネルギをまとった状態になる。

つまりこれで戦ったら体に着弾したら確実にフェイゾン汚染を受けることになる。

「・・・・これはよっぽどのこと以外発動しないでおこう。」

一人反省するフェイゾ。
だが彼は気づいただろうか、一人の天才に今の放射能を感ずかれたことに。

ＳＩＤＥ？？？（天災）

むむっ、いま誰かに天災って言われた気がするよ。まあ、どうでもいいんだけど。

「あ～あ、ちーちゃん今頃何してるのかなぁ・・・」

追っ手がいなかったらすぐにでも会いに行けるのに、いっそまたハッキングしてミサイル乱発しよっかなー。

ピピッ

ん？なんかレーダーに引っかかったみたい。どれどれ。

――――日本海上空にて高濃度の放射能感知、危険レベル計測不能――――

放射能？どこかの国が爆弾を撃ったにしては濃度が高すぎるし高度が高いな～。これは興味深いね・・・

「確かめてこよっと。」

私は原因を確かめるため人参型のロケットに乗り込んだ。

フェイザがハイパーモードを起動した直後のことである。

ＳＩＤＥフェイザ

あれからいろいろ試してみたがいつまでもいたら嗅ぎつかれそうだな。

だが時すでに遅し。

「やあやあこんにちわそこの君。」

突然後ろから声が聞こえたので振り向くと・・・・巨大な人参が空を飛んでいた。

「なんぞこれ・・・・」

「ふふふ、驚いているようだね～。まあ、そんなことはどうでもいいんだよ。君が付けているそれは何かな？」

「このＩＳのことか？」

おれはどうして場所を嗅ぎつけたのかが不思議なんだが・・・

「そうそれだよ！おかしいんだよねぇ、まだ束さんは白騎士しか作ってないし、どこかの国が作るにしてもあの事件から一ヶ月しかたってないのに作るなんて不可能なのだよ。でもそれは私から見ても完璧にＩＳ。それを君はどうやって手に入れたのかな？」

なるほど、こいつあの事件の黒幕か。ていうか俺ニュースなんてほとんど見ないからあれがＩＳに関係してたとは知らんかった。しかしどうやって説明しよう。

「これは、」

「これは？」

これは・・・

「企業秘密ＤＡ！」

「・・・・・・・・」

だって神からもらったとかいえんし、俺が作ったなんていったら説明求められそうだ。

「・・・そっかそっか、まあ言いたくないんならいいよ。」

あれ？いがいとあっさり・・・

「でもかわりに調べさせてもらってもいいかな？」

でもなさそうだ。

「調べるだけでいいんだな？」

「うん。それだけで束さんは満足なのだ。」

まあ、たぶんブラックボックスだらけだろうし同じのは作れまい。原料から調達不可能なんだから。

「じゃあいいぞ。」

「だったらこっちに私のラボがあるから着いてきて。」

遅くならないといいんだが。

ＳＩＤＥ束

私が最初に驚いたのは反応の場所にあったのがＩＳだったことだ。そして声を聞いて分かったけど搭乗者が男だということ。ヘルメットのようなものをかぶっていたけど。

とりあえず私が作ったものとは少し違うようだね。調べさせてくれるらしいからそれで私は満足だけど。

束のラボ内にて・・・・

ほうほう、これは興味深い結果がでたよ。
わたしはキーボードを叩きながらモニターを見る。

ＩＳ　プライム

シールド　３０００（ハイパー時　無限）

装甲・・・？？？　微弱な放射能反応あり
武装・・・アームキャノン　多数の属性攻撃が可能　実弾、エネルギー弾の切替可能

トライクロー　反物質エネルギーをまとった三本の爪
エネルギーによるビーム系攻撃を無　効化
が可能　自在に動かすことができる

ゲッタートマホーク　小型と大型があり小型は片刃、大型は両刃となっている。

シャインスパーク　高速移動ができる。イグニッション

ブーストに近いが、移動時はあらゆるものを弾き飛ばす。

コピーカウンター　直前に相手の放った攻撃を全く同じ威力で放つ。

ワンオフアビリティ・・・ハイパーモード

フェイゾンエネルギーを開放し、一部武装の強化、機体の性能の急激な向上　する。発動時間は1分間まで。発動中は装甲が展開し、そこからあふれるフェイゾンによってバリヤーがはられ、完全な無敵状態になる。

よくこんな狂った機体があったね。さすがの束さんもびっくりだよ。というか機体が放射能を放ってるなんて普通の人間なら死んじゃうよ。

「こんな機体に乗ってるなんて君はなにものだい？」

「言わなきゃいけないか？」

「できればいってほしーなー。」

ほんとに気になるんだもん。

SIDEフェイザ

どうしたものか・・・というかこの捨てられた子犬のような目で見るのはやめて欲しいんだが。

「・・・・・（うるうる）」

「・・・・・・・・・・・くっ」

きつい、きつすぎるぞ。これが人間で言う萌えというものか！？

「・・・・・・・はぁ、誰にも言わないか？」

「約束する。絶対に言わないから教えてー！」

「わかった・・・・・」

とうとう俺は折れてしまった。

「おれは・・・・人間じゃない。」

天才というより天災（後書き）

束には言いますけど、ほかの人にばれるのはもっとあとです。

時が経つのは速いもの（前書き）

一気に原作まで飛びます。

時が経つのは速いもの

ＳＩＤＥ東

「人間じゃない？」

彼から返ってきた言葉はそれだった。たしかに人間ならどれだけ頑丈な体でも、改造をされようと、あれほどの放射能を浴びて生きていられる訳がない。だとすると彼はなにものなのだろう。

「じゃあ、一体君はなにかな？」

「そうきたか・・・」

少しかれは顔をしかめる。

「まあ、この際いいか・・・・ここ最近で日本海で未知のエネルギーが発見されたことは知ってるか？」

「ああ、隕石が落ちたところで見つかったっていうあれでしょ？」

「そうだ。」

それと彼の正体となんの関係があるというのだろう？

「俺はそのエネルギーそのものだ。」

「・・・・え！？」

驚きの答えだ。エネルギーそのもの？そのエネルギーの意思？のようなものかな。

「簡単にいえばあのエネルギーから生まれた生命体と言えばわかるだろう？」

「あ～そういうこと。」

ということはつまり・・・・

「君・・・えっと「フェイザだ。」フェイザはエイリアンってこと？」

「そうであってそうじゃないな。たしかに本体はフェイゾン生命体だが、この体は人間のものだからな。」

「フェイゾン？」

「エネルギーの名称だ。」

そんな名前があったんだ。何はともあれ彼の正体もわかったことだしいいか。

あれ？フェイザ？どっかで聞いたような・・・

「あ！」

「うお！？」

「思い出した！フェイザってちーちゃんといっくんの家に居候して

るって言うあの。」

「なんだ、お前千冬たちの知り合いか？」

「あれ、今私あだ名で読んだのによくわかったね。」

「俺の居候してるとこって織斑家しかないし。」

まあ、居候なんていくつもしないよね。

ＳＩＤＥフェイザ

あれからかなりの長時間束の話につきあっていたらもう日が落ちていた。
さすがに帰らないとまずいといったらもう帰っていいよと許可をもらったので帰ろうとしたら、

「ばいばいフー君。」

と言われた。彼女曰くそうやって呼ぶのは親しみを込めてらしい。
まあ、いきなりだったからすこし驚いたが・・・・
そして帰ったら千冬の鉄拳制裁を食らった。なんかものすごく怒っていた。心配かけたと謝ったら結構簡単に許してくれた。それから数年いろいろあった。
千冬がモンドグロッソで優勝したり、ドイツに行ったり、一夏が誘拐されたり（このときは俺が救出しに行った。）・・・・あれ、思ったより多くないな。

そしてある時、それは起こった。

一夏がＩＳを起動させてしまった。結局そのせいで一夏はＩＳ学園に行くことになった。

・・・・・・・・・・・・・・・俺も一緒に。

テレビで一夏の写真が映された次の瞬間だ、俺の顔写真も映されていた。

これには俺も千冬も一夏も驚いた。一夏と千冬は俺がＩＳを動かせることに、俺は自分の写真が映されたことに。そして瞬時に俺は悟った。

「たあぁぁばぁぁぁぁねぇぇぇぇぇえええ！！！」

その日ほど大声を出したのは初めてだった。

俺は千冬と同い年位なのだ。（人間的に）だがあいにく身長が一夏より少し大きいくらいなのであまり違和感がない。

そして今俺はそのＩＳ学園の教室にいる。

「ちくしょう・・・・・・」

「フェイ兄、どんまい。」

うううぅ、弟分から慰まられる俺って・・・・

それから緑髪の女性？女の子？が入ってきた。どうやらこのクラスの副担任らしい。

体型は・・・ネットで表現するなら『ろりきょにゅう？』だったかな。そんな感じである。

で自己紹介が始まった。

「えー・・・っと、織斑一夏です。一年間よろしくお願いします。」

あ、一夏の番か。なんだか微妙な目線が一夏に集中してる。なんかこう、『もっと何か言ってよ・・・』みたいな空気が充満している。はっきり言ってものすごい気まずい。

当の一夏は俺に向かって目で「助けてくれ」と語ってくる。俺にはどうしようもない頑張ってくれと語り返す。すると次は窓側のポニーテールの女子、たしか束の妹だったっけ、その方に目を向けるがそっぽを向かれる始末。さあ、どうする一夏・・・・。

「・・・以上です。」

その言葉と共にクラスのみんなは一斉にズコ！っとコケる。妙にノリがいいなこのクラス。

「あ、あの～」

ああ！あの副担任の・・・えっとそうだ山田先生涙声になってるし、もうどうすればいいんだこのカオスな状況！我に止めろとでも言うのか！・・・一瞬前のしゃべりの戻ってしまった。だが、本当にどうしよう。

おれが考えているうちにバゴォ！と何かものすごい音がした。なんか一夏の唸り声が聞こえる。

「挨拶もロクにできんのか。馬鹿者」

なんだか聞き覚えのある声だ。というかものすごく知っている。というか絶対千冬だ。そういえば千冬ってここの教員だったか。それにしても黒のシャツにタイトスカートか・・・・似合ってるな。

「げっ！？関羽！？」

あ、そんなこと言ったら。　バゴォ！　あ～あ、また殴られてたし。

「だれが三国志の英雄だ。すまないな山田先生。クラスの挨拶を押し付けてしまって」

一気に態度が変わったな。やはり同僚だからか？

「い、いぇっ、会議お疲れ様ですっ。副担任なんですから、せめてこのくらいは……」

こっちはこっちで態度変わってるな。まあ、あんま関係ないし・・・・・寝よ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・

・・・・

「う～ん、もうむり・・・・・・そんなに食えない・・・」

「・・・・・・・・・・・」

殺気！？　　ヒュッ！　　バシッ！

「ちっ、受け止めたか。」

「もうちょっと優しい起こし方があるだろうよ、千冬。」

出席簿で起こされるなんてゴメンだ。別に揺さぶるだけで起きるのに。

「ここでは織斑先生だ。お前の番だぞ。」

「ああもうか。」

そういえばみんなやけに静かだな。驚くことでもないだろう。

千冬程度の攻撃を受け止めたところで。

時が経つのは速いもの（後書き）

肉弾戦でも主人公かなり強いです。

自己紹介

さて俺の自己紹介だがどうしようか、あとこの視線マジでやめて欲しい。

「え～と、フェイザ・ダークだ。呼び方はまあ、できればフェイザの方で呼んでくれ。特技は狙撃で（結構マジで得意）趣味は・・・特にないです。ちなみに織斑家に居候してます。」

・・・・まだ何か言えというのか？もうネタがないんだけど・・・・あ。

「あと専用機持ちです。宜しく。」

満足か？満足だよな！もう何も残ってないから！これ以上求めるなよ！？

結局帰ってきたのはソニックブームだった。まだ、耳がキンキンする・・・・・

「さあ、ＳＨＲは終わりだ。諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ。」

理不尽だ。どこの軍隊だよ。ここ学園だろ？たしかに兵器扱ってるけどさ。どう考えても普通の学園生活は望めんだろうな・・・・。

「ちょっといいか？」

「え？」「ん？」

さっきのポニテじゃなくて束の妹か。名前聞いてなかったのはまずかったか。

まあ、妹が話しかけてきた。一夏はものすごい驚いた顔してる。まあ、さっきそっぽ向かれたしな。多分話しかけられるとは思わなかったんだろう。

「一夏を借りてもいいか？」

「ああ、おい一夏ご指名だ。行ってこい。」

「ん、ああ。」

そして一夏は廊下に出ていった。

だるいな、あと次に束にあったらボコボコにしてやる。こんなとこ

ろに俺をぶち込んだことを後悔させてやる！

「・・・・・・はぁ。」

「どうしたんですか？ダーク君。」

ため息をついていたら山田先生が訪ねてきた。

「いえ、大人になって学園に通うなんて思わなかったんで・・・・」

「・・・え？」

メッサ驚いてるな。まあ、当たり前か。

「ほんとは千冬と同じくらいの年なのにこんな身長のせいで高校生としてぶち込まれました。丁寧に学生証まで発行して・・・・。」

「あはは・・・ということはダーク君って、「フェイザにしてください。なんかダークって恥ずかしいんで。」フェイザ君って、同い年ってこと？」

「まあ、そうなりますね。もう入学してしまって戻れないですけど。」

出来ることならこの世界に来たとこからやり直したい気分。

「えと・・・・・頑張ってください。」

言葉に詰まったところを見ると搾り出した言葉みたいだな。なぜか和むなぁ・・・

「まあ、頑張ってみますよ。ははは・・・・」

ちょっと微笑んでみたり

「／／／／じゃ、じゃあ授業があるのでこれで。」

なんだかそそくさといってしまった。なんか顔真っ赤だったな。そういえば人間は恥ずかしい時とかに顔を赤くするというが・・・恥ずかしいことしただろうか・・・・・

ヒュ！

殺気！？

ばし！

「・・・・いきなりなんだ千冬。」

「ふん！自分で考えろ。」（自覚なしか・・・・）

そのまま早足で行ってしまった。なんだったんだ。

（・・・・・・・・・・・・・・・・ここでハイパー化したらどうなるだろう。）

あまりの暇さにだんだん危ないことを考えるようになってきた。ああ、戦いたい。もう体がウズウズする。

「――であるからして、ＩＳの基本的な運用は国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したＩＳ運用をした場合は、刑法によって罰せられ――」

そのあと授業があったがもう面倒だから聴いてるふりをしてた。もう教科書の内容も覚えた。
そんななか一夏を見ると・・・・なんか焦ってた。あ～アレはわかってないな。多分先生が何を言っているのかすらわかってないな。
あのようすじゃあ・・・

「織斑君、どこか分からないところがありますか？」

一夏が余りにもオドオドしていたので山田先生が聞いてきた。

「えっと、いいですか？」

「はい、分からない時のために先生はいるんですよ。」

「全部わかりません。」

「え・・・・」

やっぱりか。山田先生あまりのことにメガネずり落ちてるぞ。

「えっと全部ですか？」

「はい。」

「・・・今の時点でわからない人は手を挙げてください。」
一夏以外は全員挙げない。もちろん俺も。
「え！？フェイ兄分かんの！？」
「お前と一緒にすんなアホめ。」
「ひどい！」
「・・・・・織斑、入学前の参考書はよんだのか？」
「古い電話帳と間違えて捨てました。」
馬鹿がいる。ここに生粋の馬鹿がいる！
バシン！
「必読と書いてあっただろうが馬鹿者。」
「・・・・・すみません」
「後で再発行してやるから一週間以内で覚えろ。いいな。」
「いや、あの量を一週間以内はちょっと・・・」
「やれと言っている。フェイザも手出しは無用だ。」
「わかってんよ。」

自業自得だしな、どのみち手伝う気はない！

「ＩＳはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遥かに凌ぐ。そういった『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解が出来なくても覚えろ。そして守れ。規則とはそういうものだ」

・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・

「一夏、大丈夫か？」

「全然、というか助けてくれてもいいじゃないか・・・」

「忘れたか？千冬に手出しするなって言われただろが。そんなだからお前はいつまでたっても一夏のままなのだ。」

「いや、わけわからないぞ・・・・」

その頃束は・・・・（前書き）

ダーク「本編は？」

作「詰まったから息抜きだ。」

その頃束は・・・・

一夏たちが学園に行っている頃、ある研究所でうさ耳をつけた少女？がせわしなくキーボードを叩いていた。

「あれ～？これも違う・・・・」

今彼女がしていることは、フェイザのＩＳ　プライムのブラックボックスを解析している。まあ、ひとつも解けていないが。

その事実に彼女も少しイラついていた。

「あーもー！なんなのさこのパスワード！訳わかんない字を並べてさ！いくら私でも意味のわからない字なんかわかるわけないよ！」

彼のＩＳのパスワード画面。そこまでたどり着くと、文字がある特定のものになってしまう。

それはプライムの元の世界で使っていた文字。形そのものが異なるものが多いためおそらく理解どころか一行たりとも理解できないだろう。

束はデータボックスのプライムの解剖図を見て呟く。

「は～いったいフー君のＩＳってなんなんだろ、ＩＳコアと他に２つのコアが入ってるしその中身は全然わかんないし。まあ、フー君エイリアン？だからしょうがないのかな？」

解剖図にはＩＳコアの両隣に青と緑の炉心らしきものが映っていた。

まあ、隠してもしょうがないので言ってしまうと、

青＝フェイゾンコア

緑＝ゲッター炉心

である。

「はぁ～、そういえば箒ちゃんのＩＳも作らないといけなかったっけ。しょーがない、これのことはこんどフー君似合ったときに聞いたらいいや。」

彼女はそのまま別の部屋に行ってしまった。

『・・・・・緑の炉心の活性化を確認、データを上書きします。』

誰もいない部屋でコンピューターが告げる。

するとデータの内容に新たな項目が更新された。

『・・・・上書き完了。』

その項目には、『ｃｈａｎｇｅＳ，Ｓ』　『ｃｈａｎｇｅＧＥＴＴＥＲ』と書かれていた。

その頃束は・・・・（後書き）

ちなみにこれはプライムから直接電波を受けとって上書きされました。

とりあえず説明

ｃｈａｎｇｅ　Ｓ，Ｓ（スターシップのイニシャル）

ＩＳの露出部（体が出てるとこ）に装甲、武装が追加されサムスのプライム３のスターシップみたいになる。色は黒と深い蒼　ハイパー時はバイザーのところが紅くなる。

武装・・・シップミサイル　威力はスーパーミサイルと同じで連射可能。一度に４発まで同時に発射可能。

　シップグランプリング　基本的に運搬に使うものだが、相手にくっつけてそのまま引っ張ったりボルテージが使える。

ｃｈａｎｇｅＧＥＴＴＡＲ

これは文字通りゲッター１，２，３にチェンジする。過程はＳ，Ｓと同じ。カラーリングがブラックゲッターの真ゲッター。武装は原作のまま。

こんな感じです。

出身？宇宙ですが何か？

「ちょっとよろしくて？」

「んあ？」

「・・・・なんだ？」

休み時間ダラダラしていたら金髪の先端がドリルみたいな髪型の女子が話しかけてきた。

「まあ、なんですの？そのお返事。」

（なんでお前にそんなこと言われなければならん）

「私に話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないかしら？」

うん、何かめっちゃ偉そう。あ～こいつ見てたらパイレーツのヘボ指揮官を思い出してきた。・・・なんか腹たつなこいつ。

「悪いな、俺お前が誰かなんて知らないから。」

「うんうん。」

お前もわからなかったんだな一夏。

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして入試主席のこのわたくしを！？」

いや、しらんて。つかイギリスってたしか料理がまずかったあそこか。
俺は一時期旅にでて世界を回っていた。（織斑家同意の上）まあ、ドイツに入ったときは軍に追いかけられたが。

「あ、質問いいか？」

一夏が手を挙げてセシリアに尋ねる。

「ふん。下々のものの要求に答えるのも貴族の勤めですわ。よろしくてよ。」

「代表候補性って、何？」

ガツン！！さすがの俺も一夏のこの質問には呆れて机に頭を打った。
とうのセシリアも口を開けて固まっている。

「あ、あ、あ・・・・・・」

「あ？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの！？」

セシリアは一夏のあまりのバカさに腹を立てたのか怒り出した。

「・・・一夏、代表候補性ってのは国家代表のＩＳ操縦者の、候補として選出された奴らのこと。平たく言えばエリートだな。」

「そうなのか。」

「そう！エリートなのですわ！」

髪をかきあげオルコットが俺たちを指さす。ていうか人に指を指すな。親に学ばなかったのか？この金色ドリル。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とはクラスを同じくすることだけでも奇跡・・・・幸福なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうかそれはラッキーだ。」

「自分はとっても嬉しいであります～」（棒読み）

「・・・・バカにしてますの？」

バカにしてるよ☆

「特に、大体、あなたＩＳについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でＩＳを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわね。」

「俺に何かを期待されても困るんだが。ここに入る以前は普通の男子中学生だったんだからな。なぁ、フェイ兄（がしっ！）・・・・・・」

「一夏、お前俺がここに来るまでどんな状況だったかわかって言ってるんだよな？」

おれは一夏の肩を引きちぎれんばかりに掴む。

「え、えっと・・・・ごめんなさい。」

「よろしい。」

「・・・・・・・・」

さっきからオコルット・・・・間違えた。オルコットが放ったらかしだがいいんだろうか。

「・・・ふ、ふん。まあでも？わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ。」

なんか無理やり話戻したな。

「ＩＳのことでのことでわからないことがあれば、まあ泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「ＩＳを動かして戦うやつなら、俺も倒したぞ。フェイ兄は？」

「ああ、相手が相手だけにきつかったが勝てたぞ。」

「は・・・・・？わ、わたくしだけと聞きましたが？」

セシリアは唖然としている。

「女子ではってオチじゃないのか？」

「絶対それだな。」
それを聞いたセシリアは顔を赤くした。
「あ、あ、あ、あなたたち、わたくしをぶ・・・・」
ちょうどそのときチャイムが鳴りセシリアの言葉は遮られた。
「くっ・・・・・、話はまた後で。逃げないことね！　よくって！？」
そう言いながらセシリアは自分の席に戻っていった。
「まだ立っている奴、とっとと席につけ」
三時間目は千冬が行うらしく、山田先生はノートを手にしていた。
「ああ、授業の前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないとな」
　意味が分からないといったかんじで一夏が首を傾げていたとこに千冬が全員に聞こえるように言う
「クラス代表者とはそのままの意味だ。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を産む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりでいろ、まあ、俗に言えば学級委員みたいなものだ」

うわ～面倒くさいな。なりたくないな～。
するとひとりの生徒が手を挙げて
「はいっ、それなら私は織斑君を推薦します！」
「なら、私はフェイザ君を推薦します！」
ああ、神はわれを見捨てたのか・・・元々信じても期待もしてないが。
どちらにしても嬉しくないぞ。ここはなんとしても一夏に押し付けるしかない！
「お、俺！？」
「では、候補者は織斑一夏、フェイザ・ダーク……他はどうだ？」
「チョッ、俺はやりたくな――――」
「自薦他薦は構わないが、推薦された者に拒否する権利はない。」
ですよね～俺も少し諦め気味なんだが・・・・
「もういないのか？いないならこの二人でＩＳでの戦闘で決定したいと思う。」
千冬が閉めようとした時にセシリアが突然立ち上がり、

「待ってください！納得いきませんわ！」

と甲高い声で叫んだ。

「男がクラス代表だなんて、いい恥さらしですわ！このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

（味わっておけばいいだろ、そんなもんオレらには関係ないから。）

原因が何をほざくか・・・・ちょ、何こっちに向け、ギャアアアアアアアアアアア！！！！

ナレーションがログアウトしまし・・・・まだ生きてるから！

ごほん、さてセシリアの侮辱はどんどんエスカレートしていき、

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては――」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ。」

あ、一夏がキレた。多分自分の国を馬鹿にされて我慢できなかったんだな。俺にはわからんが。

「なっ・・・！？あ、貴方、わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

・・・・・一夏よ、今更アチャー、って顔してもしょうがないぞ。もう取り返しつかないんだから。

「決闘ですわ！」

セシリアは一夏と俺を指差して宣言する。

「ああ、いいぜ、やってやるよ。」

「え、俺も？」

「当然ですわ。」

めんどくさいな・・・・本気じゃ戦えないしホント面倒くさいな。

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い――いいえ、奴隷にしますわよ」

・・・俺の知る中では今のこの世界にそんな身分なかったと思うんだが。

「いいぜ。小間使いでも奴隷でも何にでもなってやるよ！」

「俺は負けてもそんなのゴメンだからな。」

「話はまとまったようだな。では、勝負は次の月曜日。放課後第三

アリーナで行う。織斑とオルコット、ダークはそれぞれ準備をしておくように。それでは授業を始める。」

さて、とりあえず先手は一夏に譲って俺は適当に相手させてもらおうか。

久々の戦闘。少し楽しみだ。

出身？宇宙ですが何か？（後書き）

はやく戦いたい。

相部屋ですか・・・

「一夏、そんな状態で大丈夫か？」

おれは放課後、机でうなだれている一夏に言う。

「・・・大丈夫じゃない、大問題だ。」

あれから一夏はずっと勉強していた。（俺は見ていただけ）

だが、チンプンカンプンで何も頭に入らないと本人は主張。しょうがないので千冬には悪いが少し手伝ってやった。弟分がこんな有様だと見てられなくなった。

「あっ、二人ともまだ残ってくれてたんですね。よかったです。」

ふと顔を上げると山田先生が書類を持って立っていた。

「どうしたんですか山田先生？」

「えっと、二人の寮の部屋のことなんですが。」

ＩＳ学園は全寮制だ。生徒は全て寮で生活を送ることが義務づけられていると生徒手帳に書いてあった。まあ、理由は国からの勧誘を防ぐためだろう。奴さんたちは優秀な操縦者に飢えているからな。いちいち勧誘なんてされたら面倒だし。

「・・・でも一週間は自宅から通学するんじゃなかったんですか？」

「そうなんですが、事情が事情なので無理やり部屋割りをいじった

らしくて・・・二人共、そのあたりのこと政府から聞いてます？」

政府か・・・一夏たちはどうかわからんが、俺にとっては政府は最も信じられない物だ。いつだって上のお偉い方は汚いもんだ。そんなもの信じろなんて無理に決まっている。大方前例のない俺たちを監視したいだけだろうな。どのみち家にはマスコミ共がいるだろうしこっちの方が楽か。来るたび来るたび追い返すのは面倒だからな。

「それで織斑君の部屋は決まったんですが・・・」

「が？」

「フェイザ君の部屋がどうにも収まりきりそうにないんですよ。」

「あらら・・・・そうですか。」

「どうすんだよ、フェイ兄。」

そうだな～俺としては電気が通ってて雨風さえ防げればいいんだけど。

「どうしよ・・・・・」

「う～ん、教師の使ってる部屋なら相部屋も出来るかもしれませんが。」

ん？教師・・・・

「ちなみに山田先生の部屋ってあいてます？」

「え、あ、はい。私一人ですけど・・・もしかして。」

「・・・・泊めさせてください。」

土下座して頼む。プライド？捨てる前にもってないから。

「えっと、私の判断だけでは決められないので少し待っててください。」

しばらくして山田先生が戻ってきた。一夏はもう部屋の方に行った。

「はぁ、はぁ、とりあえずフェイザ君の部屋は私のところになりました。」

「そ、そうですか。あと息乱れてますよ？大丈夫ですか？」

「い、いえ、すこし話が混みあったので。・・・ふぅ。」

どうやら落ち着いたようだ。

とりあえず荷物を取りにいかないといかんので山田先生の部屋の番号をきいて家に飛んでった。（物理的な意味で）

じつは俺の部屋にはおれが改造したスパコンもどきがある。まあ、形がノートパソコンなのでもどきなのだが。あれじゃないと俺のＩＳの改造や調整ができんからな。

スパコン回収後俺は部屋の前に来たのだが・・・・俺の本能が開けるなと叫ぶ。でもなぜだか開けないといけない気がする。で結局・・・・・

ガチャ　　開けた。そしてそこには、

「へ？」

「あ・・・・・」

着替え中の山田先生がいた。眼福だが開けなければよかった。

「し、しつれいしました～・・・・」

バタン！

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その後山田先生は１０分間着替え中の格好のまま固まっていた。

VSセシリア

試合当日

あ~早く戦いたい。俺の魂（っぽいもの）が戦えと叫ぶ！ん？あれは一夏か、なんか暗いな・・・

「おい、一夏。どうしたそんな暗い顔して。」

「ああ・・・・それが、」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「つまり、この数日剣の稽古しかしていなくて全然ＩＳの練習をしていないというわけだな。」

「まさしくそのとおりだ・・・」

おいおい大丈夫か、しかも

「まだ専用機届いてないんだろ？」

「そうなんだ。どうしよ、間に合わなかったら。」

「大丈夫だろ、俺が先だし間に合うと思うぞ。たぶん・・・・」

とりあえず心配だな。相手のドリルが・・・

少年移動中及びスタンバイ・・・・・・・・

「フェイザ。」

「千冬か。何かようか？」

「いや、お前のことだからないとは思うが、負けるなよ。」

「わかってんよ。」

俺は千冬の言葉を背中に受けて飛び立った。

「あら逃げずに来ましたわね。」

セシリアがふふんと鼻を鳴らすがどうでもいい。それよりもあのＩ

Ｓのことだ。

――――――――戦闘待機状態のＩＳを感知。操縦者セシリア・オルコット。ＩＳネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り――――。

その手には２メートルを越す大型のレーザーライフル《スターライトｍｋ－？》が握られていた。

俺も片腕のアームキャノンを展開する。

「なんで俺が逃げなければならん。むしろお前が逃げるべきだったんじゃないのか？無様な姿を晒す前に。」

「っ！？わたくしを侮辱しますの？いいですわ。あなたが二度とそんな口が聞けないように叩きのめして差し上げます。」

警戒　敵ＩＳ操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティのロック解除を確認。

「叩きのめされるのはどっちかな？」

アームキャノン　パワービームに設定

直後セシリアはこっちに標準を向けビームを放つ。が、

「ふん！」

俺は避けずに背中の爪を前に動かし弾き飛ばす。

「なっ！？」

「その程度か？代表候補性ってのは。」

「〜〜〜っ！？踊りなさい！わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲（ワルツ）で！」

俺に粒子の雨が降り注ぐ。よける場合なら隙間はほとんどない。だがそれがどうしたというのだ？よけられないのならよけなければいい。

「ミサイルは粒子兵器には不向きだな。ならば、」

アームキャノンチャージ完了

俺は先程から溜めつづけていたパワービームを放つ。単発のパワービームはさほど強力ではない。だがチャージビームの威力はその比ではない。放たれたチャージビームは向かってくる粒子の雨をかき消しながらセシリアに向かっている。

「くっ！」

まさか当たるとは思わなかったんだろう。セシリアのＩＳに直撃した。

ダメージ７９　シールドエネルギー残量５１４

「まだですわ！」

セシリアの腰部から広がるスカート状のアーマーがはずれ、こっちを狙ってくる。
今度は実弾だ。俺は迎撃しようとするが
ＥＲＲＯＲ　アームキャノンのエネルギー漏れを確認　チャージ及びビームの使用不可
画面が赤くなり知らせてくる。
（なに！？一体何だこれは。ビームが撃てないだと！？）
――――改善するにはフェイゾンによる修復が必要。ハイパーモードを発動してください。
（そんなことしたら放射線が・・・）
気が取られていたせいで回避が間に合わず相手の弾は直撃し爆発する。
（仕方がない）
おれは千冬と約束した。負けないと。俺は光で包まれる瞬間、ディスプレイのボタンを押す。
――――内蔵フェイゾン開放　ハイパーモード起動

・・・・・・・・・・・・・・・

「フェイ兄！」

「落ち着け一夏。まだブザーはなっていない。」

「箒・・・そうだな。フェイ兄が負けるわけない。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・

「フェイザ・・・・」

「ああ、大丈夫でしょうかフェイザ君。」

「いやあいつがそう簡単に負けるわけがない。それより山田くんどうしてフェイザを下の名前で呼んでいるのだ？」

「え？それは本人がそう呼んで欲しいと。」

「そうか、年齢のことは？「知ってます。」あいつばらしたな・・・。」

「まあまあ、あれ？これは・・・！？お、織斑先生！」

「どうしたというのだ・・・なんだと！？」

二人は彼のＩＳの画面を見て驚く。なぜなら、

それが異常な量の放射線を放ったからである。

「フェイザの様子は！？」

「えと、え！？い、異常なしです。」

「どういうことだ・・・」

千冬は試合が映っている画面を眺める。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ＳＩＤＥセシリア

「やりましたか？」

セシリアが煙の上っているところを見る。

「なかなかにしぶとかったですわね。でもこれなら・・・あれは！？」

煙が晴れていきそこには青く光るＩＳの姿があった。

「よお・・・・どうした？糠喜びだったのが残念か？」

あの爆発で無傷ですって？一体彼はなにをしたというの！？

セシリアには信じがたい事実だった。だが、事実そこには無傷の彼がいる。

「そっちにはさんざんやられたからな。今度はこっちから行かせてもらおう。」

ＳＩＤＥフェイザ

なんとか凌いだな。しかし、さっきのはなんだったんだ？まあいい。

俺はハイパーモードを解除しようとしたが解除できない。

「またか・・・もう少し真面目に整備したほうがよかったか。」

――――ハイパー解除不可　エネルギーを排出してください

この機体さっきからこんなことばっかりだ。

俺はビームを切り替える

ビーム変換　フェイゾンウェーブビーム

「いくぞ・・・」

俺は次々とビームを撃つ。セシリアはそれをよけるが、ビームが屈折し当たる。

「っ追尾!?」

ウェーブには敵を追いかける能力がある。ちょっとよけたくらいでは避けることはできない。そうしていくうちにセシリアはドンドンシールドを削られていく。

シールドエネルギー残量１２０

「くっ、少々舐めすぎましたわね。」

「そうだ、相手が男だからといって弱いと決めつけないことだな。」

ハイパーモード解除

俺はセシリアに銃口を向ける。

「俺の勝ちだ。」

――――ウェイブバスター――――

セシリアはよけれないと思いスターライトｍｋ－?を盾にするがフェイザの放ったビームは全てを飲み込み、ブルーティアーズのシールドエネルギーを０にした。

そして試合終了のブザーが鳴り響く。

『試合終了。勝者――フェイザ・ダーク』

秘密とブラックボックス

俺はセシリアとの試合を終わらせピットに戻ったら一夏が既にスタンバっていた。

「来たのか、ＩＳ。」

「ああ、行ってくるよ。」

「無様な負け方したらただじゃおかないぞ。」

「わかってるよ。」

俺たちはすれ違いざまにハイタッチして別れた。

戻ったのはいいんだが、なぜ千冬が鬼の形相で待ち構えているんだ？

「フェイザ、説明してもらおうか。」

千冬はフェイザに問う。

「説明ってどういうことだ？」

いや、本音を言えば気がかりがひとつあるんだが・・・

「さっきの試合でお前のＩＳは一時的に膨大な放射線を発していた。そして、その放射線の中にいたお前はなんで平気なんだ。」

やっぱそれか、ＩＳは調べさせたらいいか。俺の正体はまだダメだが。

「俺のＩＳは色々と特殊なんでな、ワンオフアビリティーを発動したときにどうしてもエネルギーが漏れる。正確にいえばそういう仕組みなんだがな。」

「だとしてもあの量の放射線を受ければただでは済まないはずだ！だがお前はどう見ても健康体だ。これはどう説明するつもりだ！」

千冬はフェイザに詰め寄り胸ぐらをつかみあげる。

・・・・そこまで怒らなくてもいいだろう。あとさっきから山田先生が怯えてるぞ。

「ＩＳは調べればいいさ。でも俺がどうして平気なのかは言えない。色々とまずいことになるからな。」

さすがにこれだけは言いたくない。正体を知ったあいつらがどんな反応を見せるのか、想像したくもない。・・・・・俺も人間臭さが板についてしまったな。

「どうしても言えないのか。」

「ああ、いつかは話すさ・・・。」

そう、いつかは絶対に離さないといけないときが来る。意外と早いかもしれんがな。

「それより一夏の試合はどうなってんだ？」

「・・・・押されているな。」

大丈夫なのか？

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

結局負けたよ一夏のやつ・・・・しかも自滅っておい。

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこの結果か、大馬鹿者。」

「自滅なんてシャレになってないぞ一夏。」

「…ごめん」

その後たっぷりと説教してやった。

こうしてクラス代表決定戦は幕を下ろした。

放課後・・・

お待ちかねのＩＳ解析ターイムでいま山田先生が解析してる。ん？なんで俺がいるのかって？それはね俺にしかわからないパスワード画面があるからだ。

「どうだ？山田くん。」

「すごいです、改めて見るとこのＩＳの性能は異常ですね。でも、兵器のところはほとんどブラックボックスでわかりませんね。」

「そうか、フェイザ。お前なら解けるか？」

「おれのＩＳだぞ？当たり前だ。ちょっとどいてもらえますか？山田先生。」

「あ、はい。」

カタカタカタ・・・・

「は、速いですね・・・」

「たまにデータ弄ってますからね。」

・・・・ビー！

「・・・来たか。」

「？なんですかこの文字。」

異世界の文字なんて言えないしごまかそうか。

「古代文字ですよ。」

「なんでそんなものが出てくるんだ？」

千冬はなぜＩＳにそんな文字を使っているのか不思議に思いフェイザに訪ねた。

「この文字は知っている人はほとんどいないからな、これの方が解析されても読まれないから使ってるんだ。」

「なるほどな。」

「たしかにこんな文字見たことないですね。」

二人は頷く。

（パスは４つだったな）

――メトロイド　フェイゾン　サムス　コラプション――――

・・・パスワード認証

「よし、これで見れます。」

すべてのパスワードが解け、ブラックボックス化されていたデータ

が開示される。

「・・・・・・！？」

当然その中にはフェイゾンのことも記されていた。

秘密とブラックボックス（後書き）

お久です。もう無理やり振り絞った感じなんですがちょっとおもしろくないな～と思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4885v/

IS ≪The Phazon Erosion≫

2011年8月20日00時24分発行